

第 95 話<遊煙タンク>の要約と参考資料

第 95 話<遊煙タンク>の要約と参考資料

スズの粗鉍を焙焼すると、粗製の亜ヒ酸が飛び立ちます。ところが土呂久の反射炉には、亜ヒ酸を回収する設備がなく、激しい煙害を引き起こしました。和合会は抗議、施設改善要求を繰り返し、鉍山に遊煙タンクを設置させ、煙害を減らしたことで、自信をつけました。

第 95 話<遊煙タンク>の要約と参考資料

9 5 - 1 尾平鉍山の反射炉

松尾鉍山労働者・平川誠四郎さんの話（1979年2月21日聴取）

昭和8年から14年までの6年間、尾平鉍山に行った。行ったときから、反射炉はあった。錫の選鉍はクラッシャー、ボールミルで粉にしたあと、①砒鉍と硫化は上鉍にも中鉍にもはいていた、②中鉍はもう1回テーブルにかけた、③上鉍は反射炉で焼いた、亜ヒ酸は煙道にたまるが、亜硫酸ガスは飛んで出た、錫ばかしになる。

反射炉の屋根の上から上鉍（じゅくじゅくの湿った粉鉍）をいれる。30分ほど焼いたあと、反射炉の横面に4か所あけてある穴から、長い棒の先につけた板で、上鉍を奥へ奥へと送る。最後まで送って焼くと、硫化も亜ヒもないばらばらの粉（精鉍）になっている。

精練は、火にかけた鍋の中に精鉍を投げ込んで、焚くと、鉍石がどろどろに溶ける。それを型に流し込んで、錫の延べ板にした。（詳しくは不明）

反射炉で焼くときに、硫化は亜硫酸ガス、砒鉍は亜ヒ酸になって煙とともに飛んでいく。反射炉から直径50センチくらいの煙道が50mほどのびている。煙道にいくつも穴があけてあり、ここから亜ヒ酸をかきだす。

*尾平の反射炉で明らかなように、錫鉍を焼けば、亜硫酸ガスと亜砒酸がとびたつ。

なぜか、土呂久の反射炉には煙道がなかったのも、周辺にすさまじい煙害を引き起こした

9 5 - 2 和合会議事録にでてくる「ハンシャロウ」 (* 9 1 - 1 と重複)

昭和十一年十一月二十五日 定期総会 公会堂

一、煙害ニ関スル件

鉍山（ハンシャロウ）ノ煙害問題並ビニ許可ガ有ルヤ否ト通路問題ニ付キ役場ニ行キ村長ニ照会スル事ニ決定ス

右委員 惣見組 佐藤助、小笠原利四郎、南組 佐藤忠行、畑中組 佐藤義雄

(初めてハンシャロウ(反射炉)という装置の名前がでてくる。よほど反射炉による煙害が激しかったのであろう。「許可ガ有ルヤ否」という表現から、反射炉は「行政が許可していない装置ではないか」と疑問をもっていたことがうかがわれる。)

昭和十二年三月二十日 役員会 公会堂

一、ハンシャロウノ設備ニ関スル件

右ノ件ニ付左記委員ヲ設ケ明二十一日砒山主任ニ申込ム事

委員 副会長、佐藤茂、佐藤節蔵、佐藤栄蔵、佐藤良蔵

(反射炉による煙害がひどいので、和合会副会長=佐藤助=をふくむ砒山周辺に住む4人が砒山に申し入れにいくことを決めた。)

昭和十二年三月三十一日 臨時総会 公会堂

一、ハンシャロウ煙害ニ関スル件

本件ニ付イテハ先般委員ヲ設ケ砒山主任ニ打合セシタル所向フ一、二ケ月中ニ設備ヲスルカラソレマデ待ツテ呉レル様トノ御話シナリシモ煙害甚ダ多イタメ寸時モ待ツ事出来兼ネルタメ又々今回委員ヲ選定シー時モ早く設備ヲ急グ様申込ミ其レニ応ジ呉レザル場合ハ万已ムヲ得ズ村長ノ手ヲ経テ県係員マデ^{こうしょう}交照ノ上設備ノ完全ヲ計ル事ニ決定ス

若シ県ニ出頭ノ場合ノ費用ハ十二年二月二十日ヨリ三月二十日マデノ煙害料金ヲコレニ当テルモノトス

一、県並ビニ村役場ニ出張委員左記決定ス

会長 佐藤清八、区長 佐藤民造、評議員 小笠原利四郎

一、砒山事務所ニ^{こうしょう}交照委員左記決定ス

評議員 小笠原利四郎、佐藤節蔵、佐藤栄造

(反射炉の煙害が、寸時もこのままの状態では放置できないほどひどいものだったことがわかる。砒山が設備改善の要求に応じない場合は、村長を通して県に交渉することにし、派遣する委員と費用の捻出方法=1か月間の煙害料約30円をあてる=ことを決めた。)

昭和十二年五月二十五日 定期総会 公会堂

一、煙害ニ関スル件

右ノ件ニ付イテハ至急前^マ会選定シタル委員三名ニテ砒山主任ニ交渉シ其ノ結果ヲ以テ村長殿ニモ交渉シ県当局ニ行クヤ否ヤ決定スルモノトス

(3月の臨時総会で決めたことを定期総会で再確認したということだろう。)

昭和十三年二月二十三日 定期総会

三、煙害問題ニ付県行費用払戻シニ関スル件

被害者ノ意見ニヨリ払戻シヲナス事トナレリ後日必要ノ場合ニハ其費用ヲ積込ム事トナレリ

四、煙道延長ニ関スル件

煙道延長協議ノ上五月迄延期スル事トナレリ

(被害者が、県に出かける必要がなくなったとして、積み立てていた出張費用の返済をもとめ、和合会はそれを承認した。反射炉の後ろにつけられた遊煙タンクの煙道を延長する工事は、5月まで延長されることになった)

95-3 遊煙タンクづくり

佐藤正四さんの話 (1978年1月28日聴取)

わしが昭和9年から青年団支部長をした。昭和11年か12年の9月ごろだったと思う。延岡の本社(土々呂製錬所?)猪狩清一という会計が「鉾山の反射炉のうしろにタンクを作ってくれんか」と言うてきた。「煙といっしょに流れてきた亜ヒ酸が冷えて落ちるところ」といった。それを青年団で請負うてやってくれんか、という。敬さん(樋の口、正四さんの前の青年団支部長)が公民館造って金がなくなったときだったから、請負うてやった。青年団から30人くらい、3日くらい手間が出た。自分たちがやったのが始まりで、3室くらい造った。そのあと、また、2室くらいタンクを造った。全部で5室くらい造った。9尺角くらいで、窯の近くがいちばん大きい。ここから亜ヒ酸を採った。

佐藤正四さんの話 (1979年3月3日聴取)

連絡所から鉾石(粉)を落としよった。上にシュートがあった。あそこの地面は青うしとった。反射炉は屋根がかかっていた。川の向こうから、焚口の火が見えよった。真っ赤にしたのが見えよった。坑木に使わん、よこうた奴が焼き木になった。反射炉の焼き殻は美芳さん方の下にいけてある。美芳さん方前にトロ道があった。反射炉と今の美芳さん方を結ぶ水平の橋。反射炉跡は、戦後、大切坑のズリをだして埋めた。トロで、焼き木を反射炉へ。反射炉からは焼き殻を運んだ。人間が橋を渡って、亜ヒをかるうた。

遊煙タンクは、1番目と2番目を青年団が造った。それまで反射炉はあったが、タンクはなかった。すぐ上に煙突が立っていた。3日間働いたら、鼻の下なんか亜砒に負けたんで、もうやめた。3日くらいで、鼻、目、口、しる気の多いところがすぐただれる。

鉾山が頼んできて、青年団に金がなかったんで、どうかして基本金をつくらな、ということで造った。25歳まで青年団で、土呂久におる者が22~23人でた。春ごろじゃなかったですか。よからな寒い時期じゃない。

タンク造りというのは、一つ掘って、その上の段に一つ掘る。床掘りだけをやった。鉾山のツルとスコップで。反射炉から最初のタンクまでが9尺(3メートル)、次のタンクまでが2m。反射炉に向かって右後方に3分鉄板、3尺×1間を2枚つないであつた。上から鉄棒に吊るすように。

佐藤アヤさんの話（1979年3月4日聴取）

反射炉の近くで22日くらい仕事に出た。岩戸女子青年団の土呂久支部（支部長は南の佐藤トヨ子）から、地開きに行った。数え19のときやったごつある。昭和12年の3月。

女子青年団の資金作りで3日間の役目（無償）で出て、女子青年団の資金にする。日役は65銭。他の19日はアヤさんの労賃。

反射炉の家はできちよった。小屋の上に煙突が出ちよった。煙突のすぐそばで仕事すると、反射炉の煙突から雪の降るごつ垂ヒ酸が降る。反射炉に出る人が「お前ら白粉つけちよきない。垂ヒに負けるき」。反射炉の上の段で仕事した（*9畝の田のあとだから、段々になっていた）。白粉もろちから、手拭で頭も顔も隠して、目だけ出して仕事した。

反射炉の建物から地開きした場所まで、あまり離れておらん。5mくらい。建物の真後ろじゃなくて、大切側によっちよる。なんのための地開きか、知らん。そのとき橋はできちよった。地開きのあと、大工のこどり、下の川から砂かるい（何日も行った）、上の方の4番坑の鉾石分け（土の付いた鉾石とふつうの鉾石を分ける）に1日だけ行った。

反射炉では、崔大川、甲斐春光、三井保、三井ぎざぶろう、出口、高木安太郎もおらしたごたる。

佐藤ミキさんの話（1979年3月14日聴取）

学校卒業したあくる年じゃき、昭和12年の夏ごろじゃった。青年団は人夫で出た。鉾山じゃなし、工藤組の人夫じゃった。青年団は、学校卒業するといらなならん。女子と男子の青年団は別。煙突から舞い落ちる粉がかかると、鼻の脇がただれるから、頬かむりしよった。

佐藤直さんの話（1979年3月3日聴取）

反射炉の煙道は、村のもの抗議によってできたんじゃないの。

佐藤弘さんの話

反射炉の跡でかくれんぼをして遊んだ。煙道の中をくぐって、途中で顔を出したりして遊んだ。（戦後、大切坑のズリで埋めた）